

## 環境調査の結果

・実施地点数 海域 273 地点 河川等 416 地点 計 689 地点

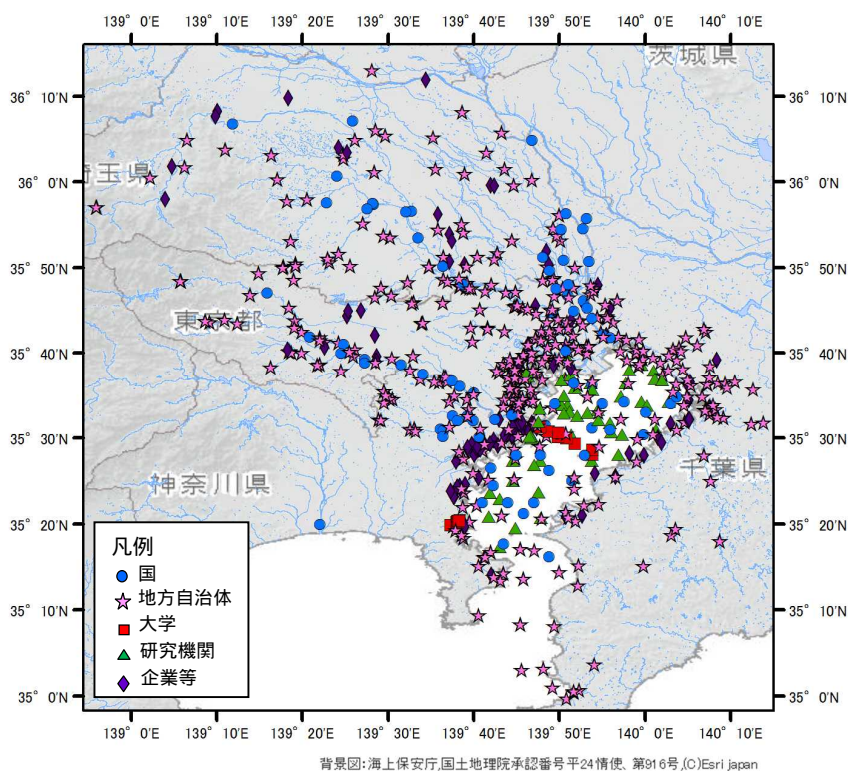


図 1 環境調査地点 (流域全体)

・水温・塩分・溶存酸素 (D0)・透明度の状況

一斉調査日 (平成 26 年 9 月 3 日) の水温・塩分・D0・透明度の状況は、図 2 のとおりでした。

表層 (海面下 1 m) の水温は、高いところで 27 くらいで、25 前後の水温を示した地点がほとんどでした。底層 (海底上 1 m) の水温は表層よりも低く、19~21 前後でした。

塩分の分布をみると、表層ではやや低塩分の海水が湾奥の西側を中心に広がっており、荒川や多摩川など河川からの淡水流入の影響があったことが伺われます。

溶存酸素量 (D0) については、表層では湾内のいずれの地点でも、水産用水基準において水生生物の生息環境の維持にあたり必要とされている 4.3 mg/L を上回っており、一部では過飽和になっている状況が観測されました。一方で、底層 (海底上 1 m) の観測結果からは、湾奥一帯に D0 が少ない海域 (D0<4 mg/L) が認められました。一部の海域では、特に底層 D0 が少ない地点 (D0<2 mg/L) もありました。このような D0 の少ない海域では底生生物の生息に悪影響が生じている可能性があります。

透明度については、湾口部では 4 m 以上の透明度が計測されていますが、湾内では 2 m 未満のやや低い透明度の地点も散見されました。

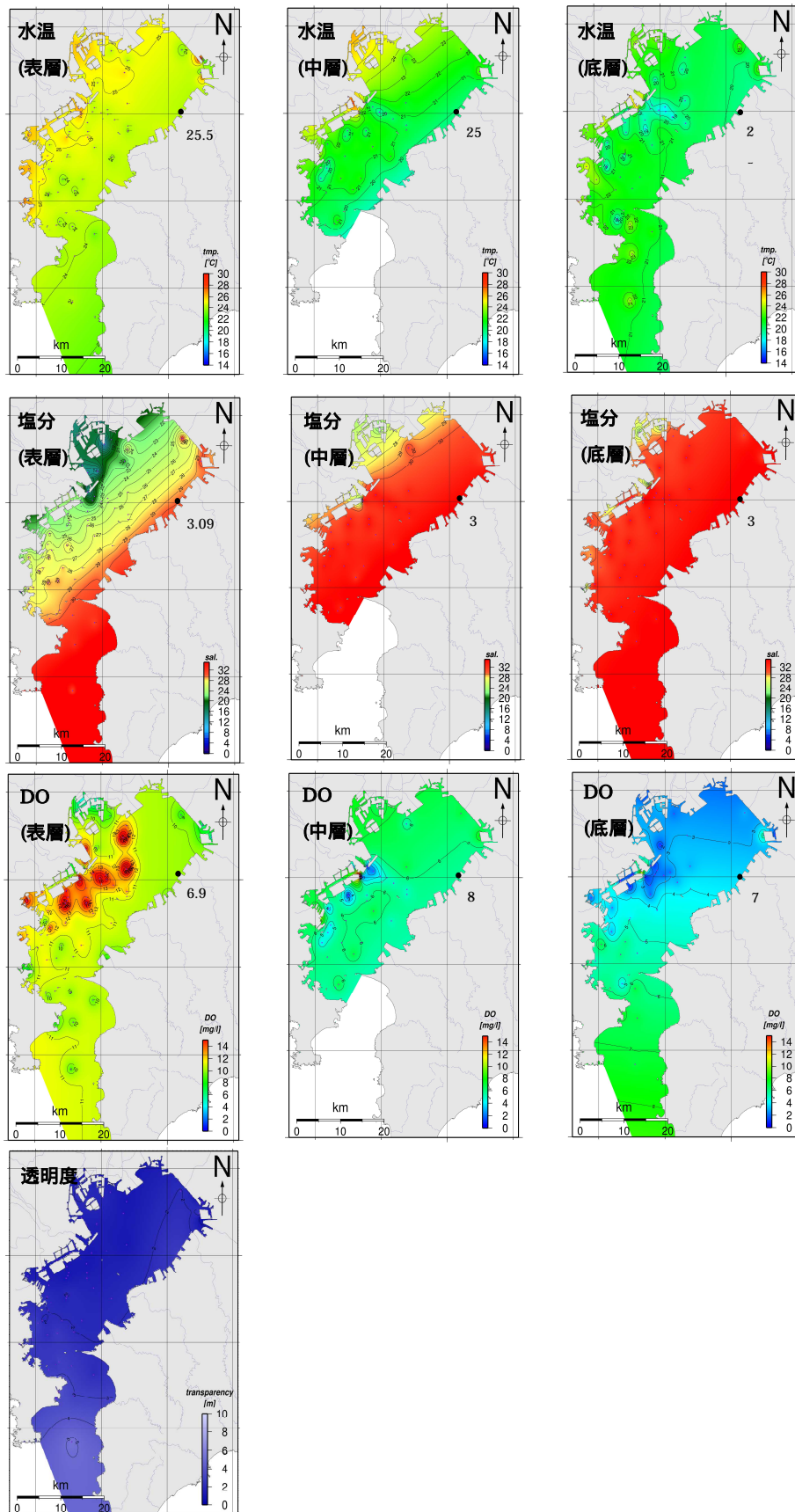


図2 平成26年9月3日における東京湾の水温・塩分・DO・透明度の状況は廃水口、出水口等の近傍データで、コンター作図から除いています。

・過去との比較

平成 26 年度調査基準日(9月3日)における東京湾における DO が少ない海域 ( $DO < 4$  mg/L) は、横浜沖から袖ヶ浦沖までの湾奥の底層に分布していました。

平成 26 年度の底層の DO の調査結果では、特に底層 DO が少ない海域 ( $DO < 2$  mg/L 濃青色の部分) の面積は、平成 25 年度 8 月 7 日と比較して狭い範囲にとどまっています。これは、実施基準日前に卓越していた北よりの風によって鉛直循環が形成され、底層水が湾奥沿岸へ運ばれた結果、表層へ湧昇するなどして貧酸素水塊の一部が消滅したためと考えられます。この北よりの風に伴い、千葉県の一部で青潮の発生が確認されています。

表層の DO をみると、一部で過飽和状態となっている海域がありました。これは植物プランクトンによる光合成が活発に行われていたためと考えられます。

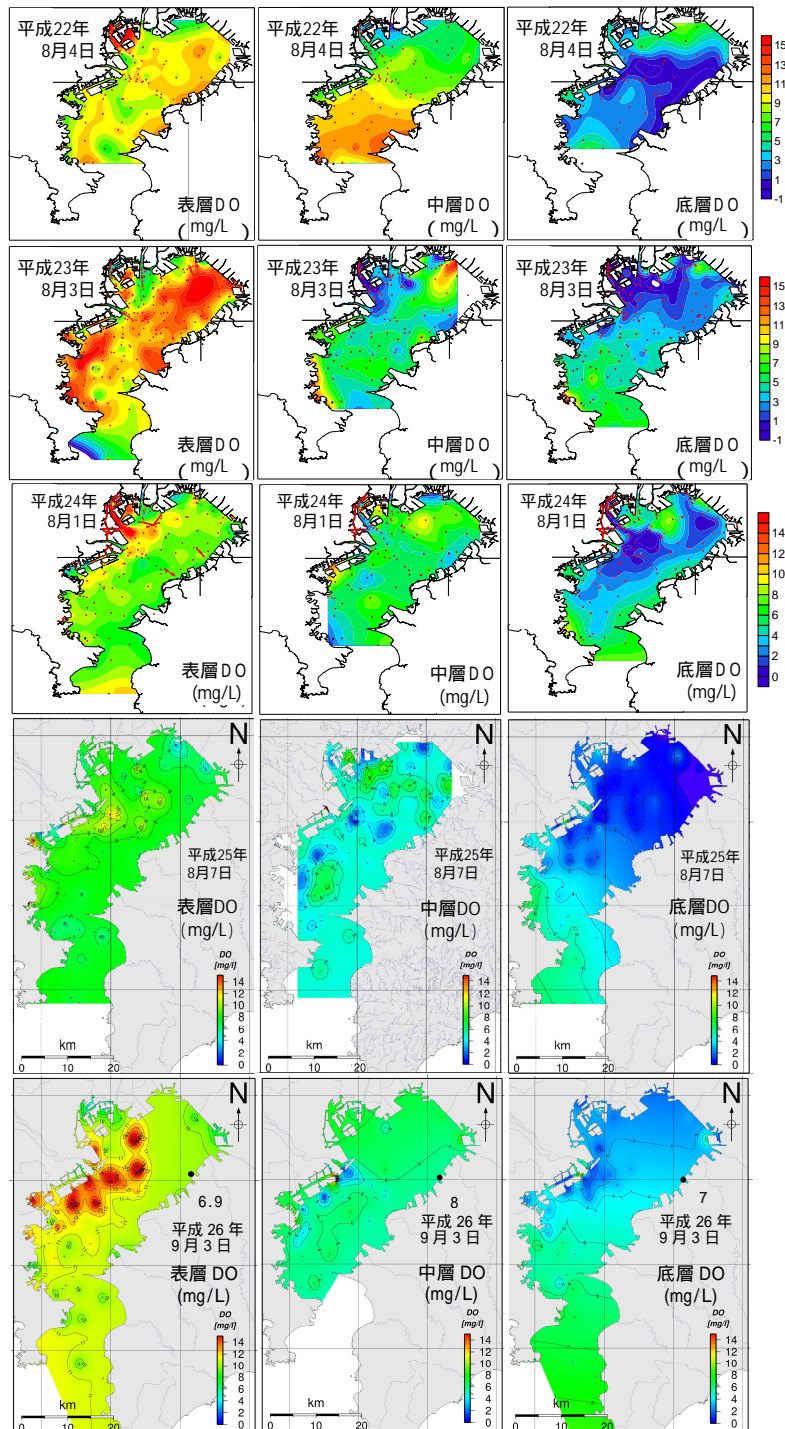


図 3 平成 22 年から 26 年の DO 分布の比較。表層は水深 1m までの平均、中層は水深の半分から ±1m の平均、底層は海底上 1m までの平均。